それでも好き

和乃　璃瑚

　何の花だろうか。さっきからずっと、甘い香りが漂っている。花に詳しくない私には、何の花の香りなのか見当もつかない。
　高級住宅街のこの辺りには広い庭のある家が多く、それぞれの庭には色とりどりの花が植えられていた。住人たちは庭でのランチを楽しみ、駆け回る子供たちを笑いながら眺めている。まるで幸せを絵に描いたような光景だ。
　私は、自分とはまったく違う世界の住人たちだと思った。ここは自分には似つかわしくない場所だとも思った。すると、なんだか咲き誇る花たちにまで馬鹿にされているような気になって、もう帰ろうかと思った途端、
「おーい！　荷物はこれだけか？」
　という声が聞こえてきて、私は慌てて身を隠した。
――彼だ。彼の声だ。
　私の心臓は狂ったように波打ち、その音が彼に聞こえてしまうのではないかと心配になるほどだった。深呼吸をしてそっと顔を出すと、彼は大きな荷物を車に積み込んでいるところだった。
　クーラーボックスにキャンピングテーブルにテント。彼の服装もジーンズにパーカーというラフなものだ。普段のスーツ姿も素敵だが、こういう格好も彼にはとても似合う。
　私が彼に見とれていると
「パパ！　僕の虫カゴと虫とり網も入れてくれた？」
　と、かわいらしい男の子が飛び出してきた。
「もちろん、ちゃんと入れたさ。お前の宝物をパパが忘れるわけないだろ？」
　男の子の頭をなでながら、彼は優しく笑って言った。
「それよりママはまだ準備してるの？」
　彼が聞くと、男の子は大人の口調を真似して言った。
「いろいろ大変なんだよ、女の人は」
「生意気なこと言って」
　彼が男の子の頭をくしゃくしゃにしながら、２人で笑っていると、
「あら何？　楽しそうね。何かあったの？」
　と、奥さんがピクニックバスケットを持って出てきた。
「ん？　何でもないよ。楽しみだなって話してただけさ」
　彼は答えて、男の子にそっとウィンクした。
　男の子は、パパと男同士の秘密をもてたことに、少し大人になったような気がしたのだろう、満足げな表情で親指を立てて彼に応えていた。
「さぁ、そろそろ行こうか」
「出発進行！」
　彼の車が行ってしまう頃には、私はものすごくみじめな気分になっていた。
「なんで来ちゃったんだろう」
　口に出して言うと、余計にみじめだった。いつまでもここにいてもしょうがないので帰ろうと

思うのだが、なかなか動くことができなかった。

　その場に座り込んでグズグズしていると、ゴールデンレトリーバーを連れた人が歩いてくるのが見えた。いぶかしく思われないように、急いで立ち上がって駅への道を歩き出した。
　ここに来るのは今日で８回目だ。来るたびにこんなみじめな気分になるのに、どうしてもやめられない。
　ただひとり、私と彼とのことを知っている親友には、いい加減に諦めろと、耳にタコができるくらい言われている。
「分かってる」
「分かってないよ。一体いつまで続けるつもり？　こんなことしてても、ずっと何も変わらないんだよ」
「分かってるよ」
「ねぇ……」
「分かってる！」
「……」
　親友は私のことを本当によく考えてくれている。きっとうんざりしているはずなのに、諦めずに忠告しつづけてくれる。本当に感謝してるし、彼女の言う通りだと思う。でも心が言うことをきかないのだ。

　彼と出会ったのは２年前の春。
　私は新入社員として、慣れない仕事に四苦八苦しながらも充実した毎日を送っていた。
　そんなある日、私は重大なミスを犯した。何とかしようとは思うのだが、パニックになってしまって、どうすればいいのか分からない。その日はあいにく、仕事を教えてくれていた先輩が休みだったことも、私のパニックに拍車をかけた。
　周りの人達はチラチラと私を見るだけで、誰も手を差しのべてはくれない。私は泣きそうになりながら、必死で落ち着こうとしていた。
　その時だ。
「何をボーっと突っ立ってるんだ！」
　ちょうど外出から帰ってきた彼の声が飛んだ。厳しい声だったにもかかわらず、私には神の声のように思えた。
　彼の指示に従ってなんとか処理を終えた時には、私は自分でも気付かないうちに泣いていた。謝罪と感謝の言葉を何度も繰り返す私に、
「僕も同じようなミスをしたことがあるからね」
　と、彼は言って、いたずらっぽく笑った。
　それが、私が恋に落ちた瞬間だった。

彼に家庭があることを知ったのは、それから数日後だった。
この前のお礼にと誘ったレストランの帰り道、彼から告げられたのだ。
その日の私の態度で、なんとなく彼は気がついたのだろう。私にクギを刺すつもりで言ったんだと思った。本当なら、彼に家庭があると知った時点で諦めるべきなのだろう。彼もそうしてほしいと思って私に言ったんだろう。
頭では分かっていた。それが分別のある大人として、正しい行動だと。でも私は諦めたくなかった。
「家庭を壊すつもりなんてないんです。こうして時々２人で会えたら、それだけで満足なんです」
私は彼にすがりついた。彼は、初めは困っているようだったが、最後には
「分かったよ」
と、優しく笑ってくれた。
それからも私たちは普通の上司と部下として会社では接し、時々食事を楽しんだ。そのうちにもっと深い関係にまで進んだが、私は絶対に彼を縛らないでおこうとした。
彼がそっとベッドを出ていく時、私は心の中で泣きながら、眠っているフリをした。彼の奥さんや子供の誕生日と結婚記念日をこっそり調べて覚えておいた。そんな大切な日に彼を誘ってしまって、彼を困らせたくはなかった。
そんな風にして、とても幸せで、とても辛い日々が過ぎていった。

ようやく私にも後輩ができる頃、私にとって、人生最大の悲劇とも言える出来事が起きた。
いつものホテルから出る時、彼の上司に出会ってしまったのだ。
次の日、私たちはその上司に呼び出され、２つの選択肢を提示された。まずひとつ目は、もう２度と２人で会わないことを条件に、２人とも会社に残ること。もうひとつは、２人揃って辞表を出すこと。
彼は即座に答えた。
「もう２度と２人では会いません」
これが、私の恋が終わった瞬間だった。
それから私は異動になり、彼とは顔を合わせなくなった。
会社なんて辞めてしまおうかとも思ったが、もしかしたら廊下やエレベーターで偶然会えるかもしれないと思い、結局続けることにした。
それ以来、私の生活は、ロボットのように仕事をこなし、ただ家に帰って寝るだけの毎日になった。ただひとつ、たまに彼の家の近くまで行って、彼の幸せそうな姿を眺める以外は。

今日も私は彼を眺めている。この前はキャンプに行ったようだった。今日は家族で何をして過ごすのだろう。帰る頃には、また私はみじめな気分になるのだろう。でも当分はやめられそうにない。どれだけみじめでも、心が張り裂けそうになっても、それでも私は、彼のことが好きなのだから。

（完　結）

それでも好き

http://p.booklog.jp/book/42707

著者：nagomino-riko
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/nagomino-riko/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/42707

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/42707

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.